

名古屋の旧町名の復活を目指す有志の会

尾張名古屋「歴史街道を行く」

名古屋の歴史を楽しむ

—お城を中心に—

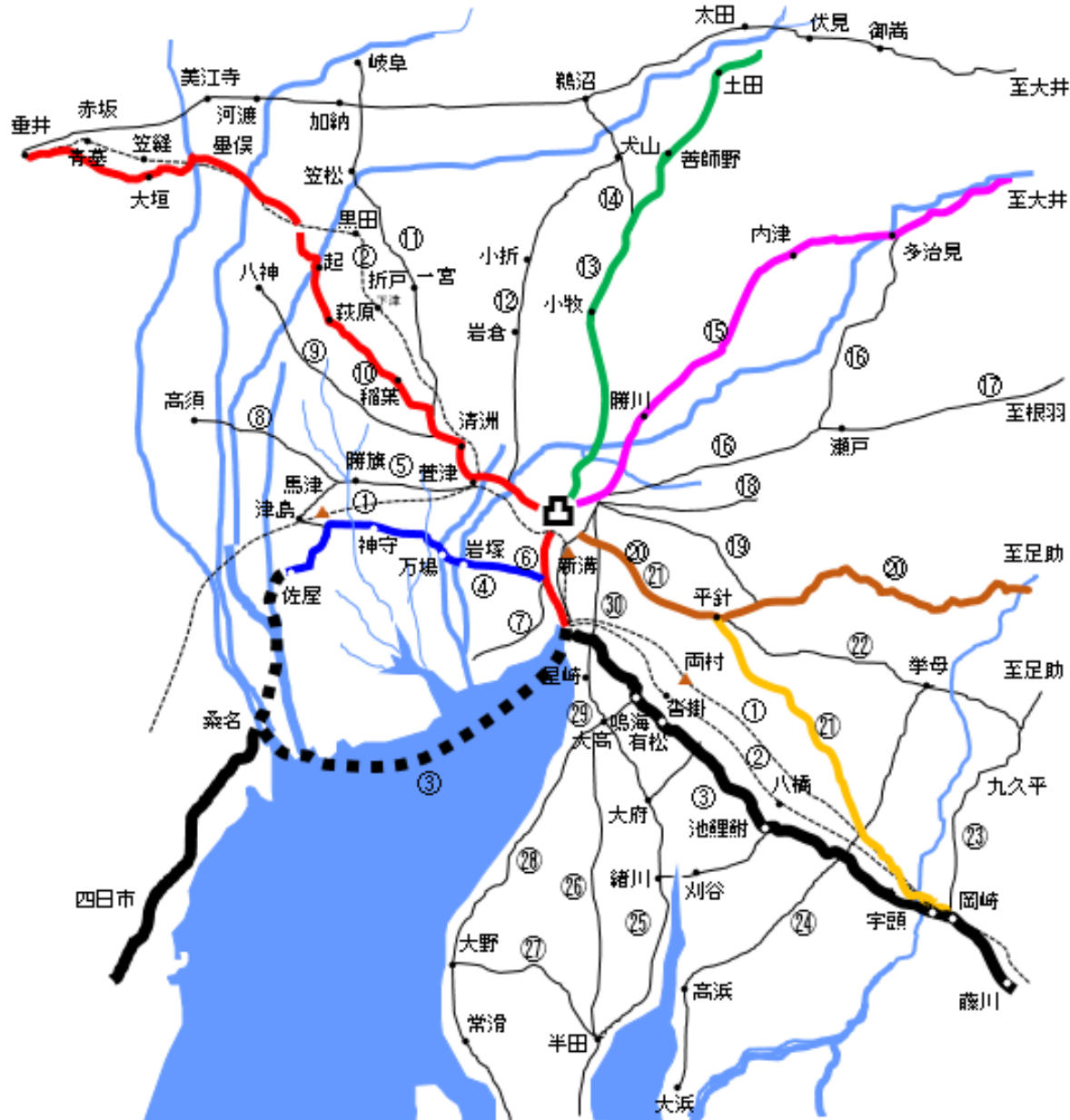


2022年9月10日

早稲田大学客員教授
大塚耕平



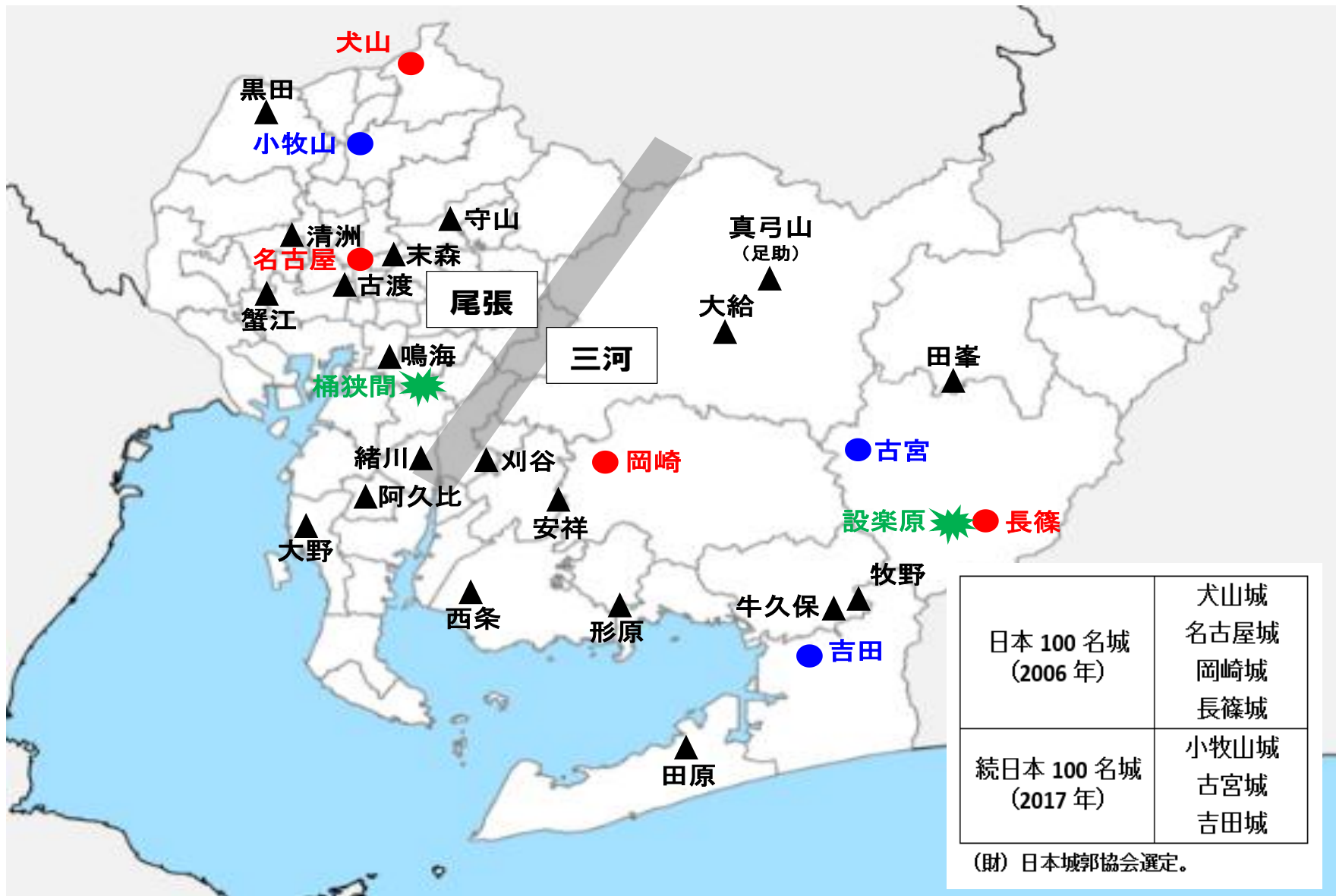
1. 尾張街道全圖



- ① 古代東海道
- ② 中世鎌倉街道
- ③ 近世東海道
- ④ 佐屋街道 (下街道)
- ⑤ 津島街道 (上街道)
- ⑥ 柳街道
- ⑦ 百曲街道
- ⑧ 高須街道
- ⑨ 八神街道
- ⑩ 美濃街道
- ⑪ 岐阜街道
- ⑫ 岩倉街道
- ⑬ 上街道 (木曾街道)
- ⑭ 稻置街道 (犬山街道)
- ⑮ 下街道 (善光寺街道)
- ⑯ 水野街道 (品野街道、瀬戸街道)
- ⑰ 伊那街道 (中馬街道)
- ⑱ 焙烙街道
- ⑲ 高針街道
- ⑳ 飯田街道 (伊那街道)
- ㉑ 駿河街道 (岡崎街道)
- ㉒ 拳母街道
- ㉓ 足助街道 (七里街道)
- ㉔ 大浜街道
- ㉕ 東浦街道 (師崎街道)
- ㉖ 半田街道
- ㉗ 大野街道
- ㉘ 西浦街道 (常滑街道)
- ㉙ 知多街道
- ㉚ 塩付街道

2. 尾張と三河の主な城郭

Copyrights©
Kouhei Ohtsuka Office
All Rights Reserved.



3. 名古屋城前史

那古野城は**今川氏親**が尾張東部まで勢力を拡大した時期に、名古屋台地（熱田台地北部）西北端に築いた**柳ノ丸**を起源とする。今川氏の庶流、**那古野氏**が居城とした。

今川氏親（1473～1526）
駿河今川家9代当主 駿河・遠江守護

今川氏豊（1522～？）
那古野城主 今川氏傍流（父氏親説有）

1532年、**織田信秀**が**今川氏豊**から柳ノ丸を奪取。**那古野城**と命名。信秀は那古野城を**吉法師（信長）**に授け、自身は同じ台地の東南を固めるために古渡城を築いて移った。

1555年、織田信秀の後を継いでいた信長は一族の織田信友を滅ぼして清洲城に移り、那古野城は叔父**織田信光**、重臣**林秀貞**に委ね、やがて廃城となった。

織田信光（1516～1556）守山城城主
林秀貞（1513～1580）織田家重臣

那古野城址は荒野になったものの、**那古野荘**の集落は大きくなり、南部に発展した熱田湊や鳥居前町や、中世尾張の中心地清洲とも道がつながっていた。

金城温古録「御城取大体図」には、那古野城下東西道路の西は「**枇杷島**」、交差して北西に延びる道路の北は「**小田井河原**」、南は「**七本松（千代田）**」に至ると記す。

「金城温古録」文政年間（1818～1830）に10代藩主齊朝が藩士奥村得義に名古屋城の調査と古記録保存を命じた。

清洲に北市場、中市場、西市場があった。清洲越しの町名説もあるが、「尾張志（藩命地誌）」は那古野荘の古義名と記す。

廃城後も城郭南に隣接していた那古野荘の中にある**今市場、中市場、下市場**は発展し、後に家康が名古屋城下町を造る際の基礎となる。

廃城から約60年後の1607年、荒地となって鷹狩をするような場所になっていた那古野城址地に、**徳川家康**が新たに**名古屋城**を築城することを決定。

柳ノ丸

那古野城

名古屋城



4. 那古野城址地選定

1600年、関ヶ原の戦いで**徳川家康**は天下を掌握したが、依然として大坂に**豊臣秀頼**、西日本に豊臣恩顧の大名、武士が布陣する中、豊臣方との戦いに備える必要があった。

東海道は五街道（中山道、日光街道、奥州街道、甲州街道）のひとつ。1603年には東海道松並木、一里塚整備を命じる。

家康は**東海道**、**中山道**を重要街道と定め、東海道については、1601年に**五十三次**設置を決め、順次宿場を整備。宿場には人馬常備し、本陣・脇本陣・高札場等を設営。

家康は豊臣方の侵攻への備えとして、交通の要衝である尾張に防衛拠点を置くことを計画。当時の尾張の中心は**清洲城**であったが、清洲城にはいくつかの問題があった。

天正地震は天正13年11月27日、29日、30日に連続して中部地方で発生した巨大地震。伊勢湾・若狭湾で津波も発生。

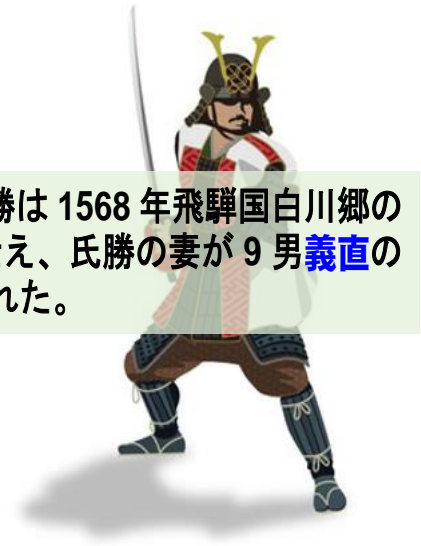
沖積平野にある清洲は、①五条川がしばしば氾濫し**水害**が多いこと、②水攻めにされると**兵站補給**に窮すること、③城郭が狭いため多くの**兵の駐屯**が難しいこと、④1586年の天正地震で**液状化**が起きて復旧がうまく進んでいないこと、等の難点があった。

家康は清洲城を拠点化することを断念し、新しい城の築城候補地として、**那古野**、**古渡**、**小牧山**などを検討。自ら鷹狩の道中、各地を検分して回った。

山下氏勝（1568～1653）仕えていた内ヶ島氏が天正地震で滅亡。秀吉に仕官し、小田原の役では先鋒を務める。

1607年、家康に那古野城址を進言したのは**山下氏勝**。氏勝は1568年飛騨国白川郷の萩町城に生まれ、**豊臣秀吉**に仕えた。秀吉没後は**家康**に仕え、氏勝の妻が9男**義直**の生母の妹であることから、1602年、義直の傳役に任じられた。

1609年家康は那古野城址への**名古屋城築城**を命じ、翌1610年**西国諸大名**の助役による**天下普請**で築城を開始。西国大名に財政負担を課し、忠誠を試すとともに、城郭の壮大さを知らしめる目的があった。



5. 御囲堤と天下普請

豊臣方と戦（いくさ）になる場合、木曾川が防衛線となるよう、木曾川左岸に工夫（御囲堤）を施し、敵の進軍時には堤を切る。

御囲堤の原型は1590年の木曾川大洪水を受け、1593年に秀吉が施工を命じた。

伊奈忠次（1550～1610）父忠家が三河一向一揆に加わり、家康配下から出奔。長篠の戦いの軍功で帰参。信康（家康嫡男）に仕えるも信康自刃で再度出奔。堺に在し、家康の伊賀越えを助け、再び帰参。

1608年、家康は伊奈忠次に命じて御囲堤建設に着手し、2年間で完成。つまり、名古屋城築城開始前に完成した。御囲堤は犬山から弥富まで延び、尾張地域を囲み込む防塁の機能を果たした。

幕府から美濃側の右岸堤防は「三尺低かるべし」との御触れが出た。左岸の御囲堤と御触れの結果、美濃側は頻繁に洪水に見舞われ、1743（宝暦元）年宝暦治水までの約150年間に100回以上洪水被害に遭った。



その結果、木曾川右岸（美濃側）には輪中が多く発達。最初の輪中は高須藩の中心地であった高須輪中である。庄内川左岸にも御囲堤が築かれ、洪水の際の右岸（小田井）領民の対応に端を発して「小田井人足」という表現が生まれた。

1610年（慶長15）年、家康は名古屋台地（熱田台地北部）の北端に築城を開始。築城及び清洲越しの完了には約6年を要した。

「十五の森」秘話 庄内川右岸（春日井市松河戸地区）に伝わる室町時代の人柱伝承。庄屋矢野家の娘が悲運に遭う。

築城は、普請（土木工事）と作事（建築工事）に分かれ、尾張と地縁の深い加藤清正を責任者とし、福島正則ほか5名を奉行に任命した。西国大名20家の助役による天下普請が始まった。



6. 作事と清洲越し

最大の難問は**石材**調達。名古屋周辺は良材が乏しく、諸大名は美濃や三河、遠くは讃岐の小豆島から石材を運んだ。貢献の証を家康に示すためか、集めた石材には集めた藩がわかる**刻印**が刻まれた。



本丸東二之門
「清正石」

最も高度な技術を要した**天守台石垣**は**加藤清正**が築き、延べ 558 万人の工事役夫が 4 ヶ月余で完成した。

作事は幕府直轄工事として行われ、作事奉行に**大久保長安**、**小堀政一**ら 9 名が当たり、大工頭は**中井正清**を任じた。正清は内裏や方広寺大仏殿の築造も担っていたため、正清の手代衆が現場の監督。

大久保長安 (1545~1613) 甲斐武田氏家臣、後に家康に仕える。小堀政一 (1579~1647) 別名小堀遠州と言われた茶人・作庭家・建築家・書家。武家茶道遠州流の祖。

中井正清 (1565~1619) 大和国出身の大工頭。法隆寺番匠 (宮大工) 中井正吉の子。大阪の陣に際しては家康の密命で大坂城の絵図を作成した。

普請中に**材木**の調達が行われ、1612 年夏から本格的な作事開始。家康から御殿より先の完成を命じられた**天守作事**は、用材調達が遅れたために**壁塗り**に支障が生じる冬までの完成が危ぶまれた。

正清は内裏や大仏殿の大工を一時的に呼び寄せ、自身も名古屋に出向いて突貫工事。秋には懸案の**壁塗り**が完了。昼夜兼行の大工事によって年内に**天守**は完成した。



清洲越しは名古屋城下の**地割・町割**を実施した 1612 年から約 6 年かけて行われた。藩祖**義直**が名古屋城に移ったのは 1616 年。清洲越しでは、家臣、町人はもとより、**社寺 3 社 110 ヶ寺**、**清洲城小天守**も移す徹底的なものとなった。

7. 名古屋城郭

名古屋城は各郭が長方形、直線の城壁、直角の隅という単純な縄張り。典型的**梯郭式平城**で、本丸を中心に南東を**二之丸**、南西を**西之丸**、北西を**御深井丸**（おふけまる）、南から東を**三之丸**が囲む。

西と北は水堀と低湿地が防御。南と東は三之丸が二之丸と西之丸を囲み、空堀や水堀に守られた**外郭**を擁する構造。**総構え**（そうがまえ）、**総曲輪**（そうぐるわ）と呼ばれる城と城下町を囲い込むさらなる外郭も計画されたが、大坂夏の陣が終わると外郭普請は中止された。

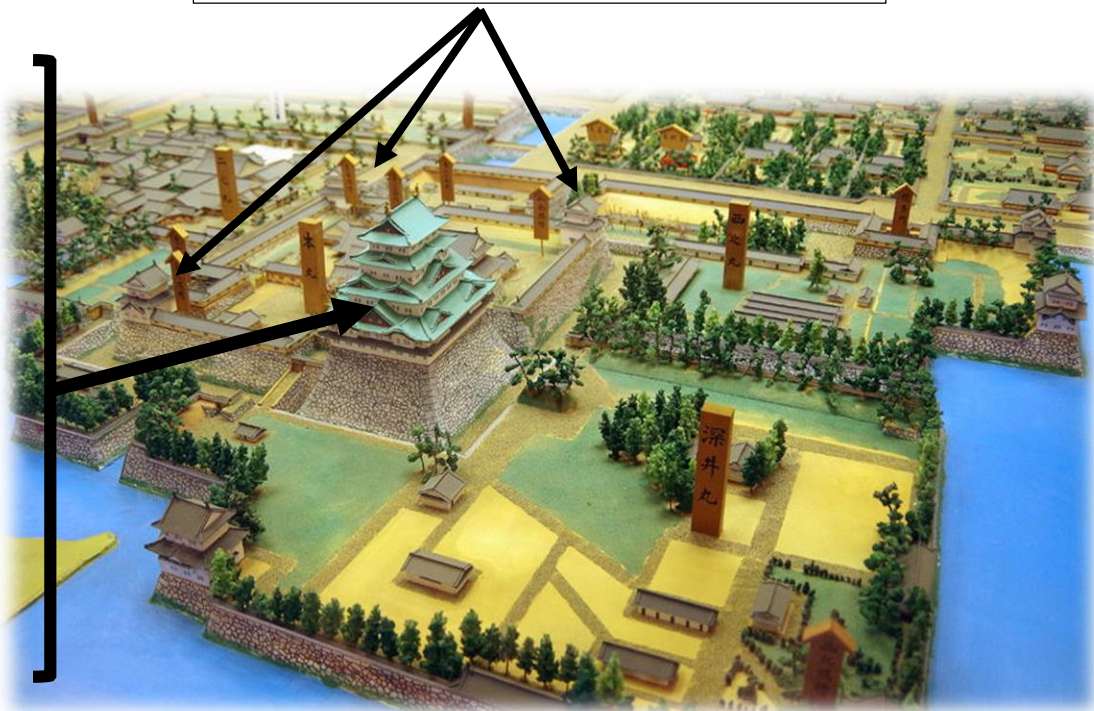
本丸には五層の大天守と二層の小天守が建てられ、大天守と小天守が橋台という通路で接続された**連結式天守**。橋台上には軒先に槍の穂先を並べた形の**剣塀**が築かれた。

大天守最上階は窓が四面に広く取られ、砲弾戦に備えた。壁面は大砲による攻撃を考慮して、檜の厚板を鎧状に組んだ。小天守は大天守の関門の役割を果たし、規模は他城の三層級天守を上回る。

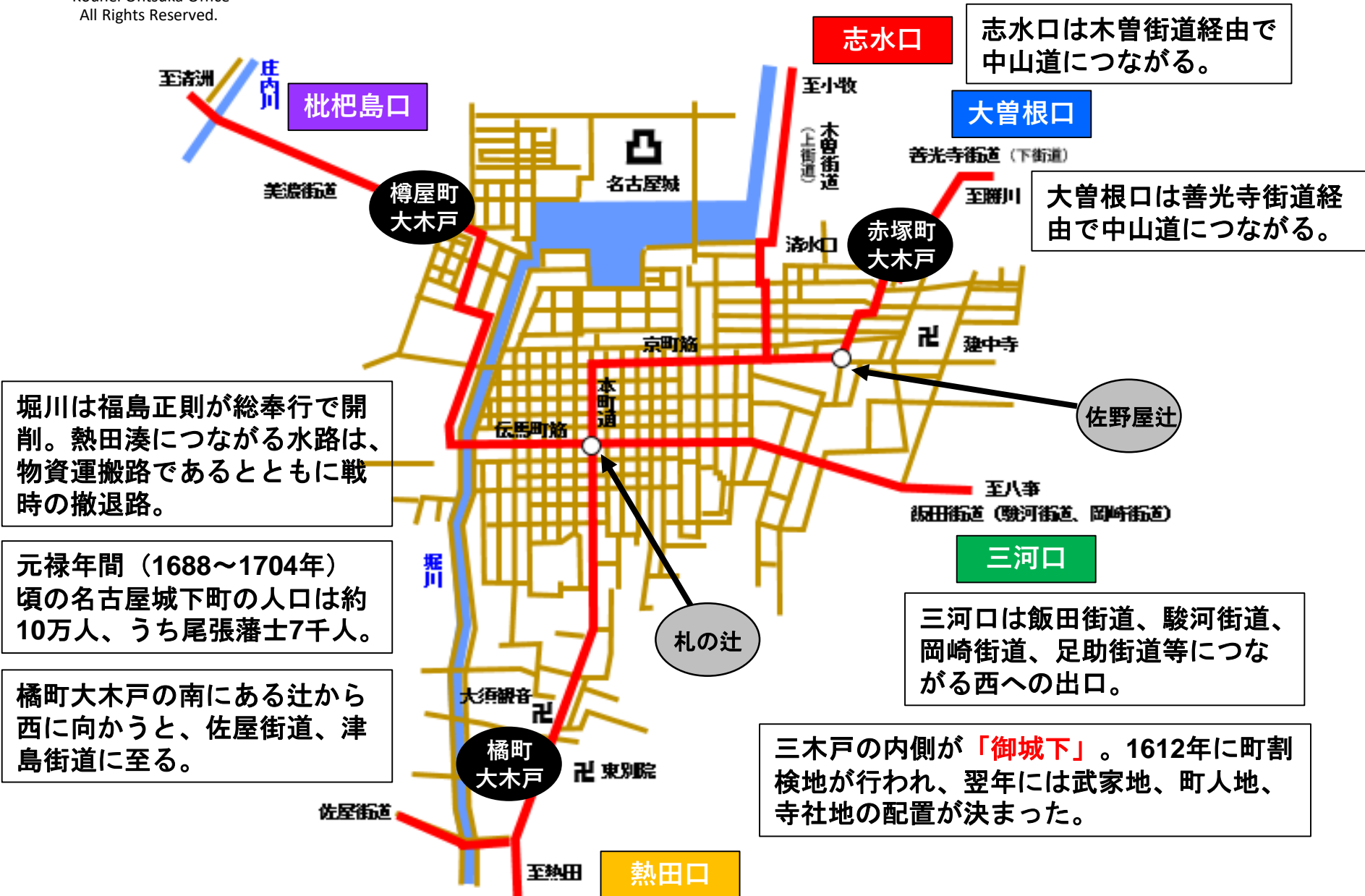
大天守の大棟には**金鯨**一対が飾られ、使用された金の量は慶長大判1940枚分。その南東側には、京都の二条城**二之丸御殿**とともに武家風書院造の**双壁**と言われた**本丸御殿**が立ち並んだ。

本丸はほぼ正方形で、北西角に天守、他の3つの角に**隅櫓**が設けられ、多間櫓が本丸の外周を取り囲んだ。門は南に**南御門（表門）**、東に**東御門（搦手門）**、北に**不明（あかず）御門**の3つ。ほとんどの櫓や塀は白漆喰を塗籠めた壁面だったが、本丸の北面のみ下見板が貼られていた。

隅櫓は2層3階建てで、他城の天守に匹敵する規模。南東は**辰巳隅櫓**（たつみすみやぐら）、南西は**未申隅櫓**（ひつじさるすみやぐら）、北東は**丑寅隅櫓**（うしとらすみやぐら）。



8. 名古屋五口と三木戸



9. 基盤割

東西は御園町通から久屋町通までの12通11丁。

南北は京町筋から大江町筋までの10筋9丁。

11 × 9 = 99街区に割り、東南角は2街区を接続し97街区。

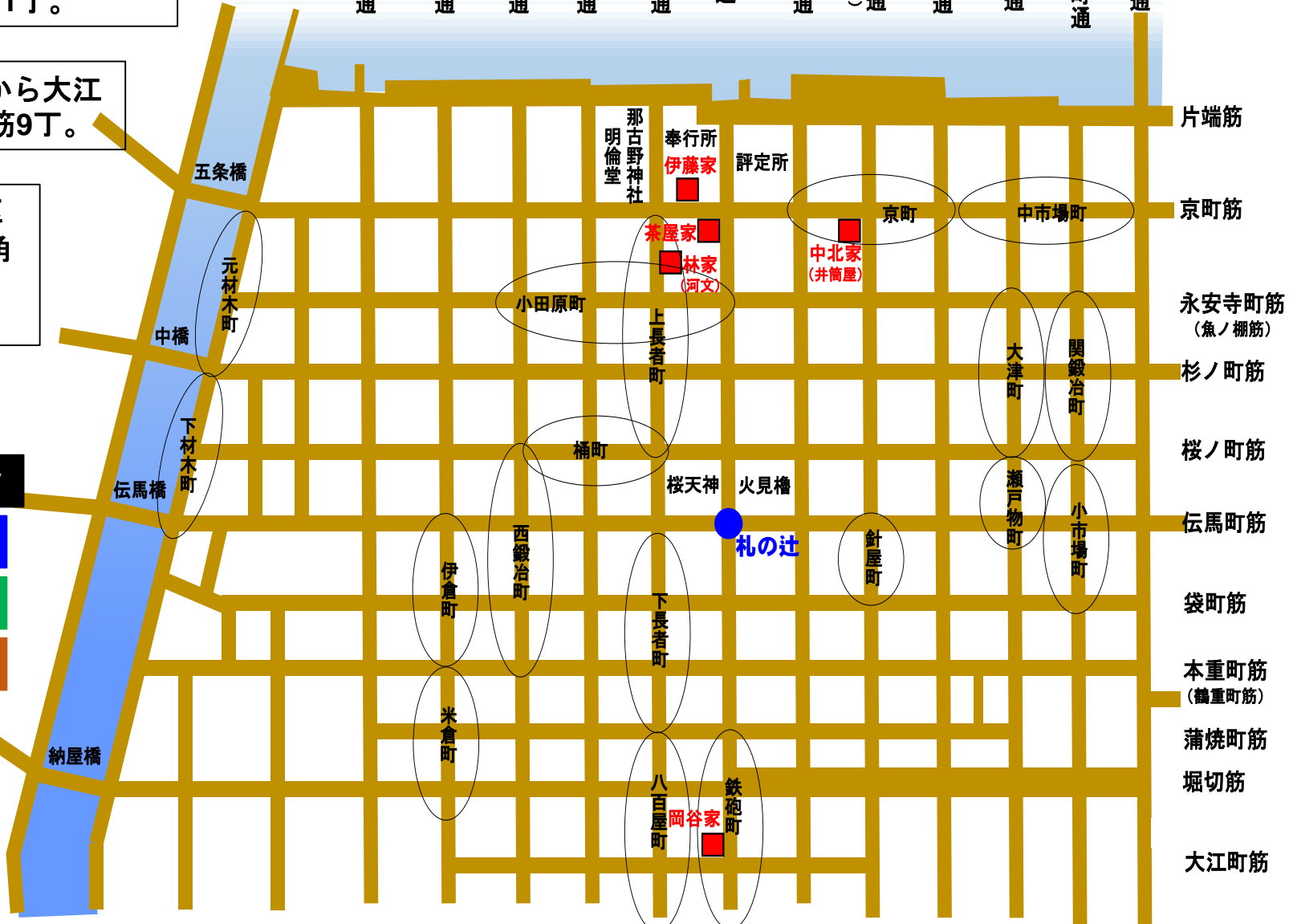
御園町通 伏見町通 桑名町通 長島町通 長者町通 本町通 七間町通 呉服町通 (竹屋町通) 伊勢町通 大津町通 鍛冶屋町通 久屋町通

町人3ルート

清洲越し

駿河越し

その他



大江町筋

10. 武家地・社寺地・町人地



武家地

城郭を中心に重臣や藩士の屋敷を身分格式によって配置。御殿南側三之丸には、成瀬・竹腰両家老家の上屋敷など。その東には、両家老家中屋敷や中級家臣団。

町人地

東西南北を武家地、寺社地、堀川に囲まれる配置。町人地を守るための家康の発想。中心は碁盤割。一街区は100メートル四方。各街区の中心には「会所」と呼ばれる名古屋城下町独特の空間があった。

社寺地

清洲越しによって多くの社寺、とりわけ寺院が名古屋城下町に移転し、3つの寺町が形成された。とくに東寺町はほとんどが清洲越し寺院。それぞれ戦時の防衛拠点、兵屯所としての役割も想定。

西寺町

城下西北の浅間町の辻を西に進む美濃街道の北側にあった「新道筋」の沿道寺院群。海福寺、宝周寺、法蔵寺、西願寺、正覚寺などが並ぶ。

東寺町

南寺町

11. 南寺町



左図は幕末期の南寺町。半分以上が清洲越し寺院。
江戸時代初期の宗派別は、曹洞宗15・浄土宗9・
臨済宗6・真言宗2ヶ寺。 ■ 清洲越しの寺院

大須観音

1324年中島郡大須郷に創建、1612年家康の命で
移転。寺号は真福寺。「大須文庫」で有名。

万松寺

1540年織田信秀が織田家菩提寺として那古野城南
に創建。人質時代の竹千代が在住。信秀葬儀の際
の信長抹香事件は有名。さらに狙撃された信長が
万松寺住職から貰った餅に救われた事件も知られ
ている。1610年名古屋城築城時に家康の命で移転。

東別院

戦国時代の一向一揆の経緯から、家康が本願寺系
寺院が城下町（基盤割）内に設営することを認め
ず。1690年2代藩主光友が基盤割南縁部の古渡城
址地約1万坪を東本願寺16代法主一如に寄進。
1805年本堂再建時に豪商5代目鈴木惣兵衛が改宗
したうえで材木一切の調達を一手に引き受けた。

(地図出典) 「東寺町の成立と変遷ー都市の歴史景観・文化景観としての寺町ー」 (名古屋文化遺産活用実行委員会、名古屋市蓬左文庫)。

12. 東寺町

右図は1755年頃の東寺町。ほぼ全てが清洲越し寺院。江戸時代初期の宗派別は、日蓮宗16・曹洞宗10・浄土宗4ヶ寺。宗派ごとに固まって配置。なお、日蓮宗の寺院は南寺町にはない。御下屋敷を挟んで尾張徳川家菩提寺建中寺が創建された。

法華寺

信長祖先、織田常勝が創建した日蓮宗寺院。1579年安土城下で行われた「安土宗論」（浄土宗と日蓮宗の論戦）で日蓮宗が敗れたため、信長は日蓮宗破却を企図。信長に信頼されていたと伝わる法華寺日陽和尚が信長を説得して難を逃れた。

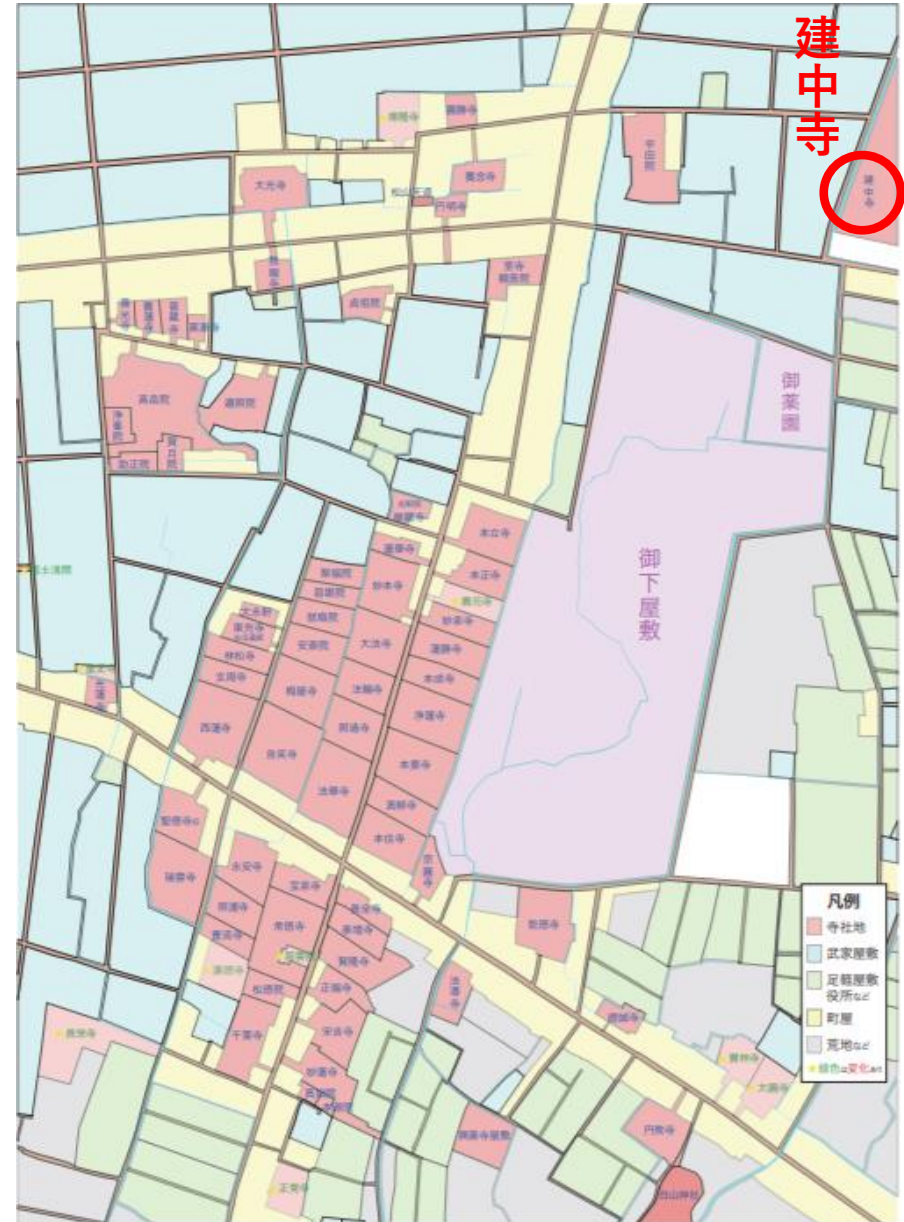
高岳院

1608年、家康とお亀の方の息子仙千代が六歳で他界し、菩提寺として平岩親吉（家康盟友・家臣、義直傳役）が清洲に創建。清洲越しで移転。

建中寺

1651年2代藩主光友が父義直の菩提を弔うため成營廓呑上人を開山として創建。尾張徳川家の菩提寺となり、最盛期の寺域は5万坪に及んだ。

（地図出典）「東寺町の成立と変遷—都市の歴史景観・文化景観としての寺町—」（名古屋文化遺産活用実行委員会、名古屋市蓬左文庫）。



13. 将軍家と尾張徳川家の因縁

将軍家

- 初代 家康 (1603~1605)
- 2代 秀忠 (1605~1623) 家康3男
- 3代 家光 (1623~1651) 先代2男 家康孫
- 4代 家綱 (1651~1680) 先代長男 家康曾孫
- 5代 綱吉 (1680~1709) 家光4男 家康曾孫

- 6代 家宣 (1709~1712) 甲府藩主長男 3代孫
- 7代 家継 (1713~1716) 先代4男
- 8代 吉宗 (1716~1745) 紀州藩主4男 家康曾孫
↳ 田安家 一橋家
- 9代 家重 (1745~1760) 先代長男 → 清水家
- 10代 家治 (1760~1786) 先代長男
- 11代 家斉 (1787~1837) 一橋家当主長男

- 12代 家慶 (1837~1853) 先代2男

- 13代 家定 (1853~1858) 先代4男
- 14代 家茂 (1858~1866) 先代従弟

- 15代 慶喜 (1867~1868) 水戸藩主7男
(徳川斉昭)

尾張徳川家

- 初代 義直 (1607~1650) 家康9男
「王命に依って催さるる事」
- 2代 光友 (1650~1693) 先代長男 家康孫
- 3代 綱誠 (1693~1699) 先代長男 家康曾孫
- 4代 吉通 (1699~1713) 先代9男
「尾張は将軍位を争わず」
- 5代 五郎太 (1713) 先代長男
- 6代 継友 (1713~1730) 先代叔父 3代11男
- 7代 宗春 (1730~1739) 先代弟 3代19男
- 8代 宗勝 (1739~1761) 2代孫 高須藩主
- 9代 宗睦 (1761~1799) 先代2男
- 10代 斉朝 (1799~1827) 将軍家斉甥
- 11代 斉温 (1827~1839) 将軍家斉19男 先代従弟
- 12代 斉荘 (1839~1845) 将軍家斉12男 先代兄
- 13代 慶臧 (1845~1849) 田安家当主7男
- 14代 慶恕 (1849~1858) 高須藩主2男 水戸藩主徳川斉昭甥
- 15代 茂徳 (1858~1863) 先代弟 高須藩主5男
- 16代 義宜 (1863~1869) 先代甥 先々代3男
- 17代 慶勝 (1869) =14代慶恕

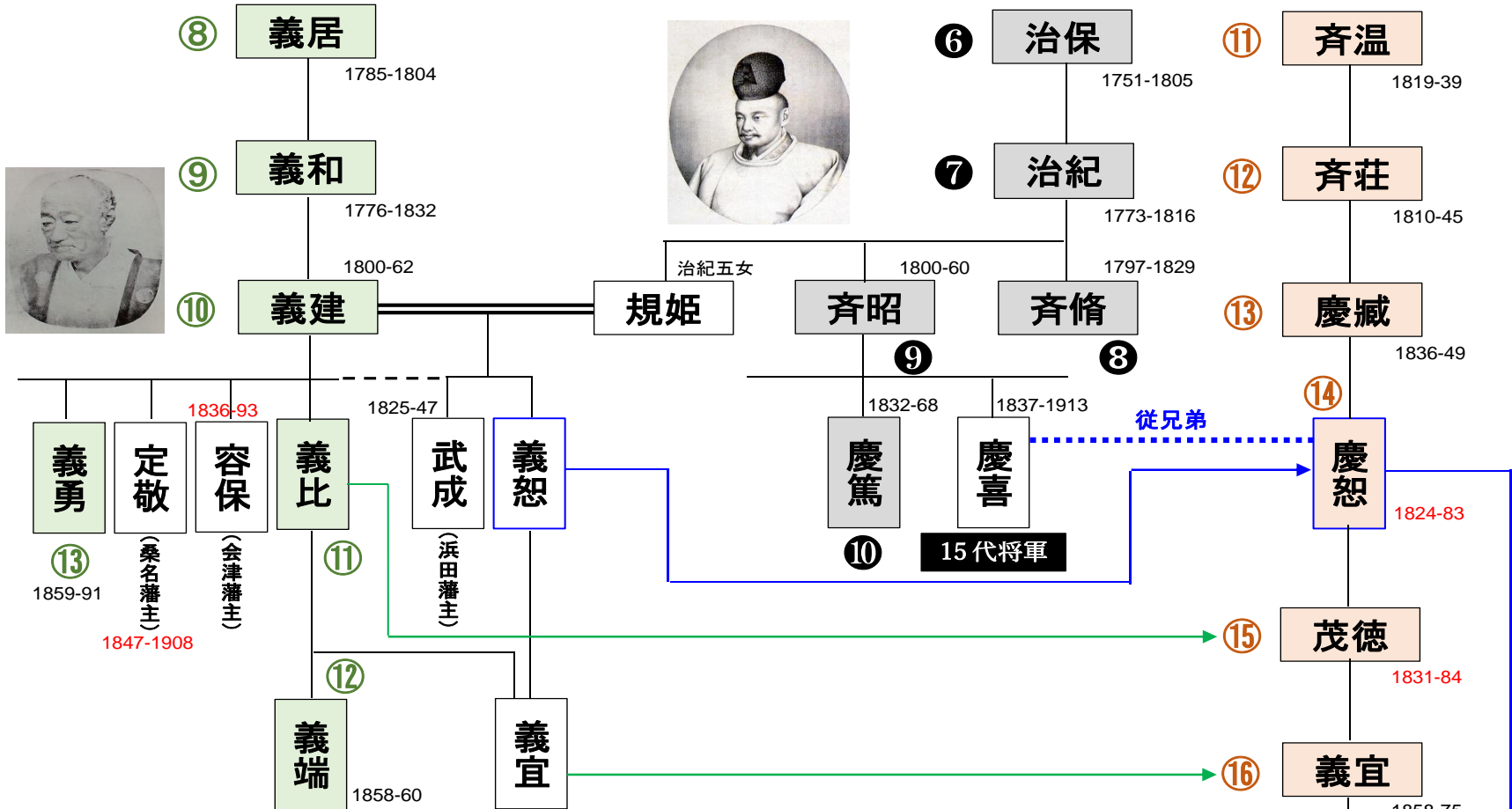
大久保松平家 (陸奥梁川藩)
四谷松平家 (美濃高須藩)
川田久保松平家

14. 高須藩と水戸藩と尾張藩の系譜

高須藩

水戸藩

尾張藩



義恕 (秀之助→義恕→慶恕→慶勝)
 義比 (鎮三郎→建義→義比→茂徳→玄同→茂栄)
 容保 (銚之丞→容保)
 定敬 (範次郎→定敬)
 慶喜 (七郎麻呂→慶喜)
 義宜 (元千代→徳成→義宜)



拙著『尾張名古屋「歴史街道を行く」』来年1月上梓予定

- | | |
|-----|------------|
| 第1章 | 尾張国史を旅する |
| 第2章 | 鎌倉街道を歩く |
| 第3章 | 名古屋城下町を訪ねる |
| 第4章 | 脇街道を行く |
| 第5章 | 尾張藩幕末史を進う |